日本語教育における「共生」をテーマとした授業実践

山森　理恵（東海大学）

要旨

本研究は中級から中上級の日本語学習者が対象の「共生」をテーマとした日本語授業の実践報告である。本実践は①異なる人が共に生きるうえでの問題点について考え，どうしたらそれが解決できるか，自分にできることは何かを考える，②日本語で①に必要な活動ができる，③わかりやすい伝え方ができる，これらを目標に行われた。実践の結果，学期当初の作文で共生の「問題点」や「解決方法」を指摘する受講生は一部であったが，学期終了時には全員が「問題点」を指摘でき，加えて「解決方法」「できること」のいずれかの記述が見られた。一方で「解決方法」や「できること」の具体性が十分でない受講生もいた。対策としてさらに意識づけをし，考えを深めるために議論する機会を設けるなどの対応が考えられる。

このような実践の事例を積み重ねることで，日本語教育のあり方を問い，日本語授業を通して異なる他者と共生する人を育てていくことを考えていくことが重要であると言えよう。

【キーワード】　共生, 日本語授業, 授業実践, 問題解決

Keywords:　coexistence, Japanese language class, practice, problem-solving

1　はじめに

さまざまな分断，対立が深まる中，一人一人が異なる立場を理解し，共生を実現するための問題点に気づき，解決方法を考え，自ら行動することが必要である。河森他（編）（2016:4）は，「共生とは，「民族，言語，宗教，国籍，地域，ジェンダー，セクシャリティ，世代，病気・障害等をふくむ，さまざまな違いを有する人々が，それぞれの文化やアイデンティティの多元性を互いに認め合い，対等な関係を築き

ながら，ともに生きること」」としている。教育の場でこのような共生への理解を深め，その重要性に気づく機会，それを経験する機会を提供することが重要であろう。日本語教育の場も，教育の場の一つとしてそのような機会を提供するべきである。

これまで既に，日本語教育においても共生につながる議論や実践がなされてきた（名嶋（編）2019，森山 2019，山森 2021 など）。しかし，これまで以上に広く「共生」につながる取り組みの重要性が認識され，日本語教育においてもより多くの議論や取り組みが行われることが強く望まれることから，1 つの実践例を報告する。

2　本研究における実践

本研究では中級から中上級の日本語学習者が対象の「共生」をテーマとした日本語授業の実践を取り上げる。2019 年度秋学期に行われた別科日本語研修課程の留学生向けの日本語科目で，内容に焦点を置く科目という位置づけの授業であった。授業の目標は①異なる人が共に生きるうえでの問題点について考え，どうしたらそれが解決できるか，自分にできることは何かを考える，②日本語で①に必要な活動ができる，③わかりやすい伝え方ができる，というものであった。受講生は日本語レベル中級から中上級の 24 名であったが，協力の得られた 15 名（ノルウェー4，台湾 3，サウジアラビア 2，アンドラ・ウクライナ・韓国・スペイン・ドイツ・ モンゴル各 1）の提出物を分析対象とする。1 学期の授業活動は表 1 のような内容であった。

表 1　1 学期の授業で行った主な活動内容

活動内容（授業回数）
① 様々な内容の，共生について考えるための漫画・記事を読んだうえでディスカッション（4 回）
②学部の授業と合同でワールド・カフェ（様々なニューストピックについて意見を述べ合う）（1 回）
③日本に住む外国ルーツの子どものための学習支援教室訪問サポート体験（1 回） ⇒定住外国人は共生の問題における弱い立場の当事者であることから，その子どもたちと接し，弱い立場の視点から共生について考えるため
④グループ発表（自分の国，日本，世界の社会問題で自分たちが興味のあるテーマ，聞く人が共生について考えるきっかけになるようなテーマ）（準備含め 6 回）
⑤発表テーマの問題について，各自日本人に意見を聞くインタビューを実施し，報告（課題として実施）

3　分析

授業を通して受講生の考えに変化が見られたか，提出された作文・コメントシート・発表のスライドを対象に分析した（表 2)。これらを意味のまとまりごとにコーディングを行った。異なる他者を理解する・存在を認める記述は「他者理解」，問題点への気づき・意識に関する記述は「問題点」，問題点の解決方法に関する記述は「解決方法」，今後自分にできることに関する記述は「できること」というコードを割り当てた。この他，自身の経験に関する記述（「経験」），自分の感想（「感想」），事実などの説明の記述（「説明」）などがあった。また，1名のみであるが，初回作文で異なる他者の存在を忌諱する「他者の否定」も見られた。

表 2　分析対象とそれぞれに対する受講生への指示内容

分析対象	受講生に対する指示内容
初回作文（全体）	「共生(＝立場の違う人がいっしょに生きること)」について，自分の意見や考えと，その理由を，具体的な例をあげて書いてください。
訪問体験後のコメントシート（シートの右の設問に対する記述）	・サポート体験をしてどう思いましたか。 ・ふり返りのとき聞いたこと，ふり返りをして思ったことを書いてください。
グループ発表（発表スライドの中の右の内容のスライド）	・具体的なケース（テーマの問題の影響を受ける当事者） ・テーマの問題点 ・自分たちが考える解決策，または考えられること
インタビュー報告（指定フォーマットの右の記入欄の記述）	・問題に対する考え／提案（インタビューで出た意見に対する自分の意見，インタビュー結果をもとに考えた自分の提案）
ふり返り作文（全体）	これまでの授業を通して，新しく知ったこと，考えたこと，学んだことについて書いてください。

4　結果と考察

授業を通して受講生に変化があったか，受講生の提出物に「他者理解」「問題点」「解決方法」「できること」の記述が含まれていたかどうかに注目すると，表 3 のような結果であった。それぞれの記述例は表 4 の通りである。学期開始時の作文では「問題点」「解決方法」を指摘する受講生は一部にとどまり，「経験」について書く受講生が多かった。外国ルーツの子どものための学習支援教室訪問サポート体験後も「他者理解」「問題点」「解決方法」を指摘する受講生は一部で，シートは「経験」「感想」が中心であった。しかし，初回作文で他者の存在を否定した受講生も

表 3　受講生それぞれがどのような言及をしたか

		受講生	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O
学期開始時	初回作文	他者														–	
		問題	●	●			●		●		●	●				–	
		解決												●		–	
		できる														–	
学期途中	訪問体験後コメントシート	他者			2 –			●	●				●	●		–	●
		問題			–		●						●	●		–	
		解決			–								●			–	
		できる			–											–	
	グループ発表[1]	他者	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
		問題	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
		解決	●	●	[3]	●			●	●	●	●	●	●	●	●	●
		できる															
学期終了時	インタビュー報告	他者	●						●				●				
		問題	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●			●
		解決	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●			●
		できる							●				●				
	ふり返り作文	他者		●	●	●	●	●			●	●	●	●	●		
		問題		●	●	●		●		●					●	●	
		解決						●						●			
		できる			●		●				●				●	●	

表 4　受講生の記述例（原文ママ，［ ］は筆者補足）

受講生の記述例	コード
この報告を通して，彼ら[同性愛者]のこともっと理解した。彼らと普通の人は同じだ。彼らも食べたり，寝たりする。彼らも自分の気持ちがある。それに，彼らは好きな人がいる。ただ，好きな人は異性に限定されないんだ。（インタビュー報告：受講生 K）	他者理解
言葉による悪口．暴力によるも．SNS での批判．両親による DV 等数え上げたらキリがありません。（インタビュー報告：H） 世界中に偏見やステレオタイプがありますが，それを変えるべきだと思う。（インタビュー報告：受講生 F）	問題点
LGBT の理解を広めることは，どうすればいいか。私は，教育が人に与える影響が大きく，やはり教育から認識を広める方が一番いい方法なのではないかと思う。まず，小学校から LGBT の課程を入れるべきという法律を作らなければならない。（インタビュー報告：受講生 J）	解決方法
私は LGBT が好きではないけど，彼らが好きな人や欲しい家族を持つことを尊重する。（インタビュー報告：受講生 K） 今後もそれ[いろいろな国の LGBTQ やいじめやほかの差別の問題]についてもっと考えようと思っています。（ふり返り作文：受講生 I）	できること

（「私は LGBT の人と一緒にくらしたら，毎日気分が悪いです。（受講生 K）」），ふり返り作文では「他者理解」の記述が見られた。また，グループ発表では「他者理解」「問題点」をすべてのグループが指摘していた。「解決方法」も，発表の目標として明確に指示されていたとはいえ，ほとんどのグループが指摘できていた。

そして学期終了時は全員，インタビュー報告，ふり返り作文のいずれかで「問題点」を指摘し，「解決方法」もしくは「できること」を指摘していた。「他者理解」への言及も多くの受講生に見られた。発表で「解決方法」を示せなかったグループも学期終了時のインタビュー報告では示せていた。ただし，「解決方法」「できること」の内容を見ると具体性に欠けるものもあった。

この結果は，授業を通してさまざまな問題について考える機会を繰り返し経ることで，他者理解や問題に対する意識が育まれ，解決方法や自分でできることが考えられるようになることを示唆する一方，解決方法やできることを具体的に考えることはなかなか難しいということも示している。

5　まとめと今後の課題

本実践から，学期を通して様々な取り組みを重ねることで，共生に対する意識や問題点への意識を高め，解決方法や自分にできることを考える力を育むことが可能であることが示唆された。一方で，共生のための問題点・解決方法・できることを受講生がより具体的に考えられるようにさらなる工夫が必要であることも示唆された。授業の目標をより明確に示し，一つ一つの活動の指示を工夫する，考えや議論を深めるため一つ一つのテーマのコメントのやりとりや議論をもう少し継続して行う，より自分に引きつけて考えられるようにトピックを選び，活動のやり方をさらに工夫するなどの方法が考えられる。

このような実践と改善を積み重ね，日本語教育のあり方を問い，日本語授業を通して異なる他者と共生する人を育てていくことが今後さらに必要だと言えよう。

＜注＞

1. 受講生 AB，CD，EF，GHI，JKL，MNO は一つのグループで発表を行った。
2. 表 3 の「-」は欠席，または未提出であった。
3. 受講生 CD のグループはグループ発表の中で考えられることについてはそれぞれ別々に述べていたため，個別にコーディングを行った。

＜引用文献＞

河森正人・栗本英世・志水宏吉（編）（2016）『共生学が創る世界』大阪大学出版会.

名嶋義直(編) （2019）『民主的シティズンシップの育て方』ひつじ書房.

森山新（2019）「日韓の共生をめざす日韓大学生国際交流セミナーと教師の役割」『人文科学研究』15, pp.121-134, お茶の水女子大学人文科学研究.

山森理恵（2021）「東日本大震災について考える日本語授業 - 民主的シティズンシップを育むことを目指して - 」『ときわの杜論叢』 8, pp.79-89, 横浜国立大学国際戦略推進機構.

Practice in Japanese Language Class with a Focus on Coexistence

Michie YAMAMORI (Tokai University)

Abstract

This study reports on a Japanese language class practice on the theme of coexistence for intermediate and upper-intermediate Japanese students. The practice aimed to enable students to 1) consider the problems of coexisting with different people, how to solve these problems, and what one can do by oneself; 2) be able to do that using Japanese and 3) be able to communicate their ideas in an easy-to-understand manner. Data from 15 students who agreed to collaborate with the research was analysed to clarify the students' perspectives on this practice.

At the beginning of the semester, only seven out of 15 students indicated problems or solutions pertaining to coexistence, while by the end of the semester, all students referred to such topics. However, some learners were not very specific in their solutions or about what